

国際シンポジウム参加記

ラム第1回国際シンポジウムに参加した。交流によって、今回の国際シンポジウムに参加し、私は神奈川大学21世紀COEプログラムのテーマの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」へ新たな認識ができた。これは人類文化研究の新しい天地なのである。

拠点リーダー福田アジオ教授のシンポジウムでの挨拶にあったように、人類の歴史においても、現実のわれわれの日々の生活場面においても、人々の交流と活動の文化は、文字で行われることは少なく、その多くは非文字で行われているのである。これらの非文字的文化は、行動などの形で、我々の日常生活に伴って流れており、人類の発展に大きな役割を果たしてきた。しかし、歴史上、これらを記録することはまれであった。事実はその通りである。歴史学家は、彼らが後代の人に伝えていきたい、一回性の重大な歴史事件だけを記録し、人類の日常的で平凡な、繰り返して行く伝承生活をほとんど無視していた。19世紀半ば以来、民俗学、人類学の発生につれて、人類は自分及び異民族の伝承的生活文化と文化遺留の記録整理及び研究を行って来て、科学的に人類文化を研究する領域を開拓した。だが、元来の学科の理論視野が限られており、研究者の学識が不足していたがゆえに、我々は人類文化研究に関心を持つと同時に、一本の木に目を惹かれて森が見えないようなこともあった。もっと範囲の広く、量的に豊富な非文字資料を深く理解して把握することを行っていないのである。神奈川大学21世紀COEプログラムの研究は、この欠陥を補い、学術の国際的最先端を占め、世界文化研究の中で新しい天地を開いた。

この21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の、当今の文化研究への貢献は、その従来の学科の境を越えたことにもある。このプログラ

ムは民俗学に基づきながら、学科の制限に束縛されておらず、ほかの学科に自主的に切り込み、新しい学際連合で、人類文化を深く探求する。そして、このプログラムは上層文化と基層文化、大伝統と小伝統の境を破り、人類文化を文化の破片のような形ではなく、完全な形で立体的に示した。今回のCOE国際シンポジウムで、私は幸いに、色々な国からの様々な分野の学者たちが一堂に集まり、それぞれの視点と学術的立場から、人類の多方面の非文字文化資料を研究していることを見ることができた。このような研究を続けていけば、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究は必ず成功を収め、人類への永久の貢献を果たすことができると思う。

神奈川大学21世紀COEプログラムは、当初、私どもの華東師範大学中国民俗保護開発研究センターをその海外提携研究機関とし、ともに博士課程在学生の育成と研究協力の計画をたてた。その内容は、若手研究者の育成、主に相互派遣、調査及び研究の指導などがある。日本における唯一の大学院歴史民俗資料学研究科を有する神奈川大学は、現在の日本の、そして世界の極めてわずかな非文字資料の蒐集・整理及び体系化を行うのに最適な研究拠点である。このような相互提携は、中国の非文字資料の体系化研究をさらに進め、両国の若手研究者の育成及び大学教育の発展を推進することが期待できる。これは、双方にとってメリットのあることである。われわれはこれからもさらに大きい成果を収めるよう努力していく。

そして、ここで神奈川大学21世紀COEプログラムが、本研究センターの研究及び若手研究者育成に協力してくれることに、感謝を申し上げる。

「非文字」と「非言語」のあいだ

村上 史展（中国 香港大学日本研究学系准教授）

2005年11月26日、27日の二日間、神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘を受けて、第1回COE国際シンポジウム「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」に参加させていただいた。わたしは専門が文学ということもあり、またシンポジウムに招かれた同僚の文化人類学者の代役ということもあって、当初「非文字資料」

というものにある種の違和感を覚えていた。わたしはライブラリー・ワークはするが、フィールド・ワークというものを満足にしたことはない。また、非文字資料といって非言語資料といわないのは非文字言語や口頭伝承を含めているからなのだろうが、伝承文学に深い興味を持っているわけでもない。むしろ、自分の文章は欄に上げ



## 国際シンポジウム参加記

て、作家の練りに練った文章を自己流に読み解くことに快感を覚えるほうである。考えてみればこの違和感は当然で、わたしが所属学科から代役に選ばれたのは専門分野からではなく、今年から交換留学生の担当を始めたからであった。

しかしそうした違和感も発表を聞いていくうちに消えていき、最後の発表者の能登正人先生（シンポジウムでの例に倣って敬称は「先生」で統一する）の、非文字文化は文字通り否定的に「文字文化ではないもの」と定義できるが、肯定的に定義するのは難しいという発言を聞いたとき、一瞬目の前に広大な沃野が開ける思いがした。わたしが見たあの沃野はおそらくわたしの誤解にもとづいたもので、非言語文化の領域と重なるものだったのだろう。非言語文化を言語によって分析すると、それはもう非言語文化としては消え失せてしまう。わたしはきっと音楽や絵画や民具や建築だけではなく広大な非言語文化全域（そういうものがあるとして）を言語による分析を経ずに、別のかたちで知として取り入れ、記憶し記録する方法があるのではないかとふと夢想したのだろう。「非文字」の意義領域は「非言語」を含みながらそれより広いので、「非文字」というのはそのパラドックス解除の可能性への誤解を招き入れながらもそれを回避する命名になっているのかもしれない。

今回のシンポジウムの趣旨には音声・図像・写真・映像・道具・建築物・匂い・味覚など文字で表現されない人間の観念・知識・行為などを総合的に体系化する方法を模索する（筆者要約）と記されている。またそうした非文字資料をプログラム拠点リーダーの福田アジオ先生は主催者挨拶で大きく図像・身体技法・環境景観の三つに分けて説明していたし、この説明は神奈川大学21世紀COEプログラムのホームページでもなされている。このなかで、匂いや味覚や身体技法のデータを収集し記録し分析するのは容易ではなさそうだが、例えば廣田律子先生は民俗芸能の身体技法の調査・分析に取り組んでいる

し（『非文字資料研究』no. 9, 2005.9）川田順造先生が基調講演で示唆し、高光敏先生が民具の面から報告したように、性交・分娩・排泄の身体技法の文化的相違も興味深い。またこうした取り組みとともに、収集したデータを保存し、それに関わる人材の養成もCOEプログラムの中に入っているが、その点に関して今回のシンポジウムでは白庚勝、ジュヌヴィエーヴ・ガロ、そしてすでに紹介した能登正人、各先生の発表があり、さらにアラン＝マルク・リュ先生、橋川俊忠先生のコメントを聞くことができた。

ただ、この種のシンポジウムではどうしても突っ込んだ深い討論が交わされることが少ない。わたしは最後の「総合討論」に欠席して、同時に開かれていた海外提携研究機関との関係に関する会議に出席していたので、「総合討論」で理論面でも実践面でもどれほど深い討論がなされたか知らないが、おそらく同時通訳を介しての1時間45分の討論では、どんなに時間を有効に活用してももっと時間をかけて論議したかったと思った人が多かったのではないだろうか。長い時間をかければいいというものでもないだろうが、その夜の懇親会の席上で「総合討論」コーディネーターの佐野賢治先生が「あんな難しいまとめは今までできなかった」とおっしゃっていて、そのときの佐野先生の難しそうなお顔をよく覚えているが、残念ながらその内容は知らない。しかし、確かに難しかったらうと想像はできる。

一方わたしが出席した海外提携研究機関との関係に関する会議のほうは、ホームページのリンク、2週間の派遣・招聘期間の使い方、AAS・JSA・EAJSなど海外の学会への参加の可能性などの意見が出て、そして思いも寄らぬこのレポートの提出を課せられた。

最後になったが、シンポジウムを企画運営され、また懇親会でご馳走してくださった方々に記して感謝の意を表したい。諸先生の歓迎のお気持ちは暖かく、あの石狩鍋は懐かしかった。

## 歴史の復権と非文字資料

18世紀日本の人口が3千万人であったとすれば、18世紀の日本には3千万の歴史があるはずだと言えよう。いや、

許 南麟（カナダ プリティッシュコロンビア大学教授）

それだけではない。18世紀に生まれ世を去っていた人々のひとりひとりを考えると、その歴史は3千万をはるかに